

オラが紋次郎

—群馬—

『木枯し紋次郎は上州・新田郡三日月村の貧農の家に生まれた。十歳の時に故郷を捨て無宿渡世の世界に入る……』笹沢左保原作「木枯し紋次郎」が今新しいヒーローとして人気を集めている。この紋次郎の人気に目をつけた群馬県藪塚本町では小説の中の架空人物にもかかわらず紋次郎の銅像を作る計画を進め、三日月村は藪塚本町であると決めた。

「紋次郎まんじゅう」を売り出し、みやげもの屋には「紋次郎コケシ」や「紋次郎三度笠」が並べられた。計算はあたった。何もなかった藪塚には連日 *紋次郎の生地、を見ようと観光客が訪れた。

「上州名代の大親分・国定忠治」にかわって「紋次郎……」が飛ぶように売れた。中でも長い楊枝のおまけつき「紋次郎まんじゅう」は人気のもと、徹夜で作っても追いつけない売れいきだ。新しい観光地として名乗りをあげた藪塚本町は今、紋次郎に明け、紋次郎に暮れる。だが、人間達の大騒ぎをよそに紋次郎はこう言っているのかも知れない。「あっしには、なんのかかわりもねえことで……」と。

横井さん故郷へ

—東京・愛知—

横井、グアムから復員して以来、国民のみなさまの深い思いやりをうれしく思います。……
今後は、何もできなかった孤独の28年間をつくため、努力するつもりです。4月25日、ようやく退院の日を迎えた。去る2月2日、故国日本の土を踏んで以来、社会復帰をめざして療養してきた帰還兵横井庄一さん。終戦も知らず、グアム島のジャングルで、孤独と闘いながら生きつづけた半生。そのホラ穴での生活は人間の強さをまざまざと見せつけた。

敗戦国日本の将兵は現代の英雄として迎えられた。訪れる先々で、熱狂的な歓迎を受け、とまどう横井さんには、英雄のひとかけらも見られない。

念願かなった、皇居参拝。天皇の兵士は深々と頭を垂れた。日本の内閣総理大臣閣下佐藤さんにも会えた。

31年ぶりに踏みしめる故郷。名古屋市中川区富田町千音寺。

出征兵士として送られた道を、今、たしかめるように歩く。

*お父さん、お母さん、ただいま帰りました。戦争のためですので、親不幸を許して下さい。

墓の前で、涙ながらに生還を報告する横井さん。戦争によって人生の全んど失った今。

これからの余生で埋めようとするのだが……人間ジャングルの中で、ほんとうに社会復帰はできるのだろうか。

これからまた、空白な生活を送らなければならないとしたら、疲れ切って、故郷の土を踏んだ帰還兵横井庄一さんの姿は決して戦後が終わっていない事を考えさせてくれる。